

# ジョセフ・ホールの聖職政治論

——清教徒革命における王党の思想——

川村大膳

## 序 目 次

- 第一章 清教徒革命とジョセフ・ホールの生涯
- 第二章 聖職政治論をめぐる論争
- 結 語

## 序

清教徒革命における王党の立場を理解する上に、論争の矢面に立った監督<sup>ビショップ</sup>ジョセフ・ホール Joseph Hall の思想と態度が注目に値する。

チャールズ一世の施政が、アングリカン・チャーチの教権にささえられたことは、この時代の特色といえるが、教会の主権者である監督の任は重く、その言動は重大な意義をもつと見なければならぬ。カンタベリー大監督ウイリ

聖職政治論のタイトル・ページ

(コロンビア大学, ユニオン・セオロジカル・セミナリー所蔵)

アム・ロードが、實際政治面の実行者であるのに対してホールは彼の要請にもとづき、清教徒に対する論争面の代理者であった。

神学的に、むしろカルヴィン主義に傾くホールが、王党の代弁者として、王権とアングリカンの監督制エピスコパシーを擁護し、忠実にその任務を果さんとするところに、さまざまな困難が予想せられる。

学識にひいで、黙想にすぐれ、詩文に長じ、後世イギリスのセネカと称せられる彼が、宗教政治の波濤の中に浮沈する姿こそ、革命前の旧体制を象徴し、近代化の過程に苦悶する十七世紀イギリスの特色を、明らかにわれわれに伝えるものではなからうか。

## 一 清教徒革命とジョセフ・ホールの生涯

ジョセフ・ホールは、一五七四年七月一日、アシュビ・デ・ラ・ズーチのブリストル・パークで生れた。父ジョンは北部の知事ハンティンドン伯に仕え、アシュビにおける彼の代理者であり、母は厳格な清教徒精神でジョセフを養育し、後年彼がアングリカンの立場から清教徒に対抗するにいたっても、基本的にはこの幼少期の母の感化が強くのこっていた。アシュビのグラマー・スクールを経て、ケンブリジのエマヌエル・カレッジへ進み、一五九五年フェローにあげられ、非常な賞讃のうちに、修辞学の講義を行なっている。詩文に長じ、ことに諷刺詩(1)によって名声を博した。やがて聖職に入り、一六〇八年には皇太子ヘンリー（一六一二年歿）の説教師となった。ジェームズ王が監督教会の儀式と祈禱を熱心にとり入れようとすることに對して、ホールは積極的な支持を与えなかった。しかしその学識が買われ、ジェームズ治世中は信頼を得ており、一六一二年カルヴィニズムとアルミニズムの対決のために行なわ

れたドルトの宗教会議には、イギリス代表として列席している。ジェームズの歿後も、ホールはその学識によって、チャールズ王やカンタベリー大監督ウィリアム・ロードの信任を得ている。一六二七年エクセターExeterの監督に任ぜられるが、ロードは、ホールのカルヴィニズムに絶えず警戒し、清教徒と和解をはかろうとするホールは、つねにロードに監視されていた。

## ホールと革新派

宗教政治論が漸く巷間にきびしくなるに及び、一六四〇年四月、ホールは「神聖監督論」<sup>(2)</sup>を著わし、アングリカニズムの立場を擁護した。カルヴィニズムに傾いていた彼が、ロード主義を真向から支持すること著作をなした真の動機については不明であるが、これによってロードは、自己の陣営の有力な代弁者としてホールに期待するところ頗る大きかったと考えられる。時恰も、十一年振りにチャールズ王の召集した議会は、革新派の勢力のために流会となり、いわゆる短期議會Short Parliament（四月十三日～五月五日）に終った。ロードのアングリカニズムによる施政方針は、いよいよ強化され、同年五月の僧侶會議Convocationによってそれは端的に示されている。「エトセトラの誓い」<sup>(3)</sup>として革新派から最も嫌悪された同會議の決定事項は、監督及びその他アングリカンの僧侶に対する攻撃を熾烈なものとし、またそれをめぐるパンフレット論争が、世情をいよいよ騒然たるものにした。ロードはアングリカニズム擁護の論をホールに期待し、それに答えて彼が著したのが「聖職政治論」<sup>(4)</sup>（一六四一年一月）である。これに対し、「スメクティムヌス」<sup>(5)</sup>なる匿名で五人の清教徒牧師が反論をかかげ、さらに、ジョン・ミルトン<sup>(6)</sup>、ロバート・グレヴィル<sup>(7)</sup>との論争がそれにつづいた。ホールは学識あるアイルランドの監督アッシャーに援助をもとめ、彼の「監督起源論」<sup>(8)</sup>があらわれた。リンカーンの監督ウィリアムズが、清教徒との和解を図って上院につくった宗教委員の中にホールは加えられた。この

間議会の監督団に対する攻撃はきびしく、短期議会は上院における監督の投票権を拒否し（五月一日）、議会後かの「エトセトラの誓い」を通過させたという理由で、ホールはじめ十三名の監督彈該起草委員会が任命せられた（七月三一日）。ホールは教会法と僧侶會議の行為について弁護を行なっている。国王がスコットランドを訪れ、同地における監着職を廢止することに同意して讓歩を示したが、イングラントに対しては強気で、空位の監督の補充を行なつた。ホールはこの間、イギリス人とスコットランド人の和平を説いて各地で歡迎されるが、十一月十五日、ノリジの監督にうつされた。ロードにとっては、ホールを重用することは彼自身の革新派に対する弁明をあらわすもので、自ら右の任命を、「儀式と法皇主義とアルミニズムのためにのみあるような人」<sup>(9)</sup>という彼についての非難に対する解答だと述べている。

### 長期議會と監督団

一六四一年十一月三日再開されたいわゆる長期議會は、革新派の大諫奏上提<sup>(10)</sup>によって保守派との激突となるが、それは宗教政治的に見て、国王とロードによるアングリカニズムと中流階級にささえられた清教主義（長老主義）との対立であるだけに、アングリカニズムの牙城である監督達への非難攻撃はすこぶる顯著であつた。リンカーンの監督ウィリアムズ（十二月四日よりヨークの大監督）が、監督団の指導的地位にあつた。十二月二十七日、議場を取り巻く暴民におそわれたウィリアムズは、上衣をはぎとられ辛じてウエストミンスター<sup>(11)</sup>の副監督の邸にひき上げるといふ事件があつた。激怒した彼は直ちにロンドン周辺にいた十三名の監督を召集し、自らペンをとつて議會に対する抗議文を書き、監督達の承認を得て国王に手渡した。「請願と抗議」<sup>(12)</sup>（十二月三〇日）がこれである。ホールは勿論その署名者であつた。しかし、それが急いで提出され、国王もまた型通りにそれを上院議長に提出、院内で朗読させたの

で、監督団にとっては事をかえって重大なものにしてしまった。すなわち右抗議文には、彼らに加えられた暴力に対する忿懣のほかに、前述の通り監督達は議会で合法的に投票権が拒否されているにもかかわらず、強制的に彼らの欠席せしめられている間の議會を通過した法や投票並びに諸決定を無効にするとの条項があるため、下院はいち早くこれをとりあげ、署名者のすべてを叛逆罪として提訴し、ホールも含め十二名の監督はタワーに拘禁された。しかるに、国王の認可なくしてかかる重大問題を下院のみにて決し、直ちに投獄するというこの不合理について、国王一派は五名の下院議員を叛逆罪として弾劾した<sup>(43)</sup>（一月三日）。上院のにえきらぬ態度に業を煮やした国王は、翌一月四月手勢をひきいて下院に乘込み、周知の通りイギリス議会上空前絶後の下院干渉を行ない、民心は王から離叛して、内乱へと突入する重大事件に発展したのである。

下院は監督達を法皇尊信罪 *Præmunire* とし、その財産を没収したが、保釈によって一時タワーを出た後再び下院にとらえられ、六週間の拘禁を経て五〇〇ポンドの保釈金をつんで五月末に出獄をゆるされた<sup>(44)</sup>。そこでホールは任地のノリジにはじめて赴き、彼の説教は歓迎された。内乱中一六四三年三月二七日の王党员所領没収法の通過によってノリジに乘込んだ議會党の委員によって、彼は財産はもとより、「食卓や子供の絵までのこらず」押収され、わずかに篤志家の援助によって生活することが出来た<sup>(45)</sup>。四三年九月二十二日、議會党は嚴肅同盟を宣言し、長老主義による国教を定めたが、その後もホールはノリジにおいて従来の組織を維持していた。しかししばしば一般民の侮辱を蒙り、教会は迫害をうけ、ついに彼も家を追われ（一六四七年五月）、晩年はノリジの近くハイガムに隠遁生活を送り、著作に専念し、五六年九月八日八十二才の高令をもって歿した。

註(1) ホールの最初の著作は、ウィリアム・ウィットカーの死をいたむ英詩（一五九六年）で、諷刺詩 *Viridmarum, Sixe*

*Bookes* (1597) によって名声を博した。

ホールの全著作を収録した後世の全集には左の二つがある。

- The Works of Joseph Hall, D. D., successively bishop of Exeter and Norwich : with some account of His Life and Sufferings, written by himself. A new edition, revised and corrected, with considerable additions, a Translation of all the Latin Pieces, and a Glossary, indices, and notes. 12 vols., Oxford, D. A. Talboys, 1837.

- The Works of the Right Reverend Joseph Hall, D. D., Bishop of Exeter and afterwards of Norwich, a new edition, revised and corrected, with some additions, by Philip Wynter, D. D., president of St. John's College, Oxford, 10 vols., Oxford, at the University Press, 1863.

- (2) Episcopacie by Divine Right, asserted by Joseph Hall, Bishop of Exeter, April 1640. **E. 203.** (8) (謝罪書である) 一六四〇年五月のロンドン・キヤンセルの書状に於ける The Works by Wynter, IX, 142-231. Doctrine and Discipline...established in the Church of England...nor will I ever give my consent to alter the Government of this Church by Archbishops, Bishops, Deans, and Archdeacons, (&c.) 此等の書状に於ける Hall の言はるは、謙遜なものである。

- (4) An Humble Remonstrance to Parliament [in defence of Episcopacy, By Joseph Hall, Bishop of Exeter] Jan. 1641. **E. 204.** (5) The Works by Wynter, IX, 282-296.

- (5) Smectymnus なる Stephen Marshall, Edmund Calamy, Thomas Young, Mathew Newcomen, William Spurstrow の五人の頭文字を連ねたものがある。彼等の凶悪な

- A Answer to a Booke entitled An Humble Remonstrance by Smectymnus, Feb. 1641. **E. 161.** (4)

- A Vindication of the Answer to the Humble Remonstrance, from the unjust imputations of frivolousness and falsehood. Wherein the cause of Liturgy and Episcopacy is further debated. By the same Smectymnus, June 1641. **E. 165.** (5)  
それぞれに対するホールの反論は、

- A Defence of the Humble Remonstrance, against the frivolous and false exceptions of Smeectymnus, wherein the Right of Liturgy and Episcopacy is clearly vindicated from the vain cavils and challenges of the answerers. The Works by Wynter, IX, 297-371.
- A Short Answer to the tedious Vindication of Smeectymnus, By the author of the Humble Remonstrance, Sept. 1641. **E. 169.** (2) The Works by Wynter, IX, 358-443.
- (9) “ミムンノローナ闘争”  
Animadversions upon the Remonstrant's Defence against Smeectymnus, Sept. 1641. **E. 166.** (11)  
ローナはミムンノ闘争に對して、  
A modest Confutation of a slanderous libell, entitled Animadversions upon the Remonstrant's defence against Smeectymnus, Jan. 1642. **E. 134.** (1)  
ミムンノ闘争に對して “ミムンノ闘争” といふ名の書物がある。  
An Apology against a pamphlet called a modest Confutation of the Animadversions upon the Remonstrant against Smeectymnus, May 1642. **E. 147.** (22)  
(7) Robert Greville (Lord Brooke), A Discourse opening the Nature of that Episcopacie, which is exercised in England, Nov. 1641. **E. 177.** (22) Haller, Puritanism and Liberty.  
(8) James Usher, Original of Bishops and Metropolitans briefly laid down.  
(6) Laud, History of his Troubles. (DNB)  
“ラルシニウス” は “予知による予定” 万人の救済、意志の自由などの教説によつてカルヴァンと強く対立し、ことに原始教会を主として、國家を教会の上に置くことをからみながら “ラルシニウス” は十七世紀にカルヴァン主義と対立するアングリカンの総称といふべしといふのである。  
G. Davies, Arminian versus Puritan in England, ca. 1620-1640, Huntington Library Bulletin, No. 5, April, 1934, 156-179.  
(5) The Petition of the House of Commons, which accompanied the Remonstrance of the state of the Kingdom, which it was presented to His Majesty at Hampton Court, Dec. 1, 1641. (Gardiner, C. D., 43, 202-232)



- (11) Clarendon, earl of, *History of the Great Rebellion*, 6 vols., Oxford, 1888. Vol. I, 469-475.
- (12) To the Kings most excellent majesty, and the Lords and Peers now assembled in Parliament. The Humble petition and protestation of all the bishops and prelates now called by his Majesty's writs to attend the Parliament, and present about London and Westminster for the service, Clarendon *ibid.* 472-473.  
 ...they do in all duty and humility protest, before your majesty and the Peers of that most honourable House of Parliament, against all laws, orders, votes, resolutions, and determinations, as in themselves null and none effect, which in their absence, since the seven and twentieth of this instant month of December, 1641, have already passed...
- (13) Articles of high treason, and other misdemeanours, against the Lord Kimbolton, Mr. Pym, John Hampden, Denzil Hollis, sir Arthur Harlerigg, and William Strode, members of the House of Commons. (Clarendon, *ibid.*, vol. I, 479-481)  
 1 彼らは叛逆的に、この王国の基本法や政府をくつがえそうと試み、王から権力をとりあげ、その臣民を専制的暴力的に支配せんとした。  
 2 彼らは多くの誹謗によって、王とその政府を人民から疏外し、王を国民の嫌惡に導かんとした。  
 3 彼らは王の軍隊を、王命に不服従ならしめ、彼らの叛逆的計画にくみするようつとめた。  
 4 彼らは叛逆的に、イングランド王国に外国勢力を侵入させようつとめ、すすめた。  
 5 彼らは叛逆的に、上下院の権利の存在をくつがえそうと努力した。  
 6 叛逆計画を完成するため、実力と脅迫をもつて議會を強制的に参加させ、その目的のため議會をけしかけ、王に対する暴徒を黙認することにつとめた。  
 7 彼らは叛逆的に、王に対する戦争を起こそうとたくらんだ。
- (14) Praemunire は、破門あるいは法皇の勅令によつて、ローマ法皇權をイギリス国王の上におく罪科で、十四世紀からイギリス国の福祉を妨げる法皇權を抑制するために法制化を見た。その後補足され、ヘンリー八世治下には、監督に選ばれた人物の聖叙を拒否した大監督あるいは監督は、この罪に問われることになった。<sup>25</sup> Hen. 8, c. 20, s. 6, (1533)  
 監督達の拘禁は、途中わずかの釈放があるが、新年から聖靈降臨（一六四二年五月二十九日）までとなる。
- (15)

(16) 一六四三年三月二七日の基本的接収令によると、その序文に、正義にもとづき、王党 delinquent の財産は国家維持のために没収するとあり、その理由は、それらが今日まで混乱を長引かせるために用いられたからである。したがって、議会に対して矛をとつたもの、王党に加担したか王の主義を援助したものには、すべての動産と不動産に対し、またローマカトリック教徒の財産はその三分の二が対象となつた。八月には罰則をうける王党の定義をひろげたが、王党員の財産の五分の一を妻と子のために保留することを決めた。かくて国家が得た王党財産は、動産をせり売りし、不動産をテナントに貸与した。

P. H. Hardacre, *The Royalists during the Puritan Revolution*, The Hague, 1966, 19.

(17) *The Solemn League and Covenant*, S. R. Gardiner, C. D., 267-271.

## 二 「聖職政治論」をめぐる論争

ヘンリー八世によるイギリス教会のローマからの独立は、一種の政治的分裂であり、教義においては基本的にローマカトリックのものとどめていゝる。その後イギリス教会は、教義的にも大いに變化し、はじめはルーテル主義に、次第にカルヴィン主義に傾むいた。イギリスにおける二大学、オックスフォード、ケンブリッジにおいても、数世紀にわたり、カルヴィンの神学が支配しているといわれる。しかし、イギリス人一般について見れば、神学に関心を示すよりも、祈禱書に耽ける態度が濃厚で、信仰箇条がいかにプロテスタント的であっても、祈禱書の主たる要素はカトリックの意味をもち、エリザベス以後の教会の特色を示すものといえよう。宗教改革とルネッサンスから得た要素と初代の教父達の遺産をたくみに融合し、イギリス教会はひろい意味で新旧両要素をそなえ、利用している。折衷主義を好み、妥協に天分を示すイギリス人の特色のあらわれと見ることが出来よう。しかし、議会政治のごとき、政治領域において見事にその実を結んだ折衷主義が、宗教のごとき絶対的な事柄において、いかなる反響を呼び起こすで

あろうか。政治領域において美德となる妥協が、宗教領域においては蔑視される場合が往々にして生じる。この意味で、ホールの思想は、十七世紀の宗論対立の渦中であって、きわめて苦しい立場といわざるを得ない。

### ホールとローマカトリック<sup>(1)</sup>

ホールはその教養と神学的立場から、明らかにカルヴィンの色彩を帯びた思想家である。アングリカンの聖職についてからも、その傾向は持続され、その態度は彼のローマカトリック観によって端的にうかがうことが出来る。すなわちホールによれば、イギリス教会は古代教会より三つの信条（使徒職、ニケーア会議、アタナシウス派）と四つの統一会議をうけついでおり、現在は分裂してローマもその一部に過ぎない。ローマは腐敗した部分であるが、なお一部であることには違いない。イギリス教会はその妹であり、宗教改革のおかげで、ローマ教会に次第に入り込んだすべての過失と附加物、間違った信条と迷信的行為を一掃することが出来た。過失というのはすべての初代使徒の教えに背くものである。イギリス教会は、ローマの僧アウグスチヌスによって創設されたものではなく、彼が来る以前に純粹な形で存在し、それは使徒時代のもので完全にうけついでいる。これに反し、ローマ教会はたしかに三つの信条にはよるものの、多くの過ちを犯し、聖書と初代教父の教えにもとる過誤と迷信におち入った。教皇の不可謬については使徒達は何もいわず、トレント会議で得られた成義の觀念も誤まっている。聖書は信仰により、信仰のみにより、人の行ないうるいかなる業によるものでないことを教えている。煉獄と免償について、赦さるべき罪と赦すべからざる罪の区別について、聖書は何もしるしていない。また教父達は、聖書が教会を支配するもので、教会が聖書を支配するものではないと教えている。信仰上のすべての重大なる決定は、神の声すなわち聖書から出ている。独身を強制的に誓わせることは聖書になく、初代教会はそれを知らない。それはヒルデブランドのときにあらわれ、ローマ教会が

それを取り入れたために、僧侶の道徳は悲しむべきものとなった。聖変化、ミサの犠牲、聖者の祈禱などについては躊躇なく反対し、聖餐におけるキリストの存在は、肉体的なものではなく、精神的なものである……。

右のような比較的ラディカルな反ローマ思想は、もとより彼のカルヴィニズムに起因しているが、それはアングリカンの一部からも好まれないものであった。

### 「聖職政治論」の内容

右のように、対ローマ教会論において明確なプロテスタンティズムに立つ彼が、ひるがえって清教徒に対してイギリス教会擁護の立場に廻ると、いかなる態度をとるのであろうか。

ホールのイギリス教会擁護論は、すでに「神聖監督論」（一六四〇年四月）によって、ウィリアム・ロードの立場を全面的に擁護する態度に示されている。さらに、ホールの信頼を得、その奨めによって公表された「聖職政治論」（一六四一年一月）は、最も注目に値する所論であろう。それは概ね前者とその基調をひとしくしているが、語調はむしろ穏やかになっている。この書において彼は、今日の思想的混乱が、誹謗をこととするセクトや邪悪な人々の恣意放埒に由来することをなげき、<sup>(9)</sup> 名譽ある議會に一般のかける期待を述べ、<sup>(8)</sup> いかに無秩序が荒れくるっている、この国を支配する正統派は冷静に使徒本来の秩序を保っていることを訴え、<sup>(4)</sup> その例として祈禱と監督職について説明した。

すなわち、祈禱については、ローマ的なものではなく真のキリスト教的なものであれば、古くから教会の制定した祈禱形式には重要な価値をみとめ、「私は懇願するが、この神聖なる勤行の形式を、無知で邪しまな人々の高慢な輕蔑に曝すことなく、諸君の敬虔な先輩達の信心行為を持続し、育て、さらに諸君自身もこれを利用し、われわれの尊

い殉教者達が、連禱を口にして天国に上ったのならば、この慎重を欠いた新物食いに、それによって自ら幸福にひたっている人々のものを輕蔑させないように」と述べている。<sup>(6)</sup>

監督政治の形式について、これに対する世間の不当な評價に驚き、これは、一五〇〇年来持續されたもので、この国に渡来してからも、何ら矛盾なく今日まで伝えられ、そのことだけでも尊敬に値すること、何ら変更をみとめない。indifferent のことからや長年用いられた良いもの、教会や国家で十分その基礎をみとめられたものについては、輕々しい理由で取り除く必要のないことを、われわれは理論的にも經驗からも教わっていると述べている。<sup>(7)</sup>そして初期教父からの由来について説明し、監督は、その召集を神から、管轄の地位と権限を国王から受けているので、その階序的な優位に関しては何ら異議はみとめられず、教義によって除外し、法によって禁じたものをとり入れる必要はなく、自分の立場は肯定的につきると断定した。<sup>(8)</sup>ただし、神権によって監督職が出来るという場合に、教会存在の絶對的需要の上に（いかなる妨害が入ろうとも）それを要求する明白な神の法をいうのではなく、その存在を保証し、そのあるべき場所を要求する神聖な組織をいうと念を押した。<sup>(9)</sup>したがって、大陸のルーテル派、改革派の教会については、われわれはキリストの配偶者としてこれら姉妹教会を尊敬し、権力や組織（監督制度）の拒否されているこれらの教会は、彼らの必要から栄光と完全について、あるものを欠くとはいえず、一教会としての本質には変るところない、という柔軟性を示した。<sup>(10)</sup>

### スメクティムヌースの批判

「聖職政治論」に関しては直ちに清教徒牧師団からなる匿名の「スメクティムヌース」が嚴しい反論を行なった。その主旨は、監督は長老の上に人間が作ったもので神の名によるものではなく、ホールがアングリカンの監督は初代

教会のそれと本質的に同じであるとすのに対して、今日の監督は四〇〇年までのものと本質的に異り、初代には見られぬ監督権を有するとし、ジェロームの言葉をひいて、「彼らが木のカリスをもつとき、僧侶は金であり、金のカリスをもつようになれば、僧侶は木になった」と酷評している。<sup>(4)</sup> また祈禱について、それは改革派のものと本質的に異り、法皇主義に通ずるもので、四一六年まで教会はそのようなものをもたず、人々が神と祈りによって交わらんとするために、今日の祈禱書はそれを妨げるものとしている。

スメクティムヌースとホールの応酬がくり返され、前者が比較的論理的であるのに対し、ホールの論拠は修辭的で、相手を知的に暗く、道徳的に邪惡であるとし、論議は平行線をたどるばかりであった。スメクティムヌースにひきつづき、ミルトンがこの論争に参加して、清教陣營の第一線にのり出し、詩文の筆をすてて政治論争に挺身するに至ったことは注目値する。

## ロバート・グレヴィルの批判

プラトンのイデアリズムの哲学を身につけ、ミルトンとならぶ当代の自由思想家グレヴィルも、ホールの「監督政治論」に対する有力な反論をしたためた。その一節をうかがうと、

「ここに一人のすぐれた学識ある（とくにそれはすべての人々の目にひらかれない学識ではあるが）聖職者がいて彼の主義の擁護を行なっている。そこで私は彼の意見について二、三の私見を述べよう……たとい彼の著にある言葉がすべて真実であるとしても、重要な点が見逃されている。すなわち問題は、キリストの時代から監督が存したか否かではなく、これらがその同胞の上に権力を有したかどうか、あるいは一人の監督が他のものの上に管轄権をもつかどうかということである……劔による強制的服従が行なわれるところでは、入口を開く鍵はなく、この点に

ついで同書は最小のヒントも与えていない。さらにそれが教会における尊大な権力であるばかりでなく、政治においても同じであることについて、われわれは何ら解答を与えられていない……聖書において監督（福音の司牧者）が存在し、政治問題にも権威をもつことはあるが、それは特定の人々に関すること、他の者は、完全に確信をもつてそれを拒否している……」<sup>(3)</sup>

グレヴィルは、監督が教会において indifferent のことがらに対し一方的な決定者であると同時に、同じ立場を国政にまで及ぼし、国王の専制権力を助長することに、最も熾烈な反撃を示している。<sup>(3)</sup>

註(1) T. F. Kinloch, *The Life and Works of Joseph Hall, 1574-1656*, London, 1951, 139-143.

(2) Hall, *A Humble Remonstrance* (original), 2.

(3) *ibid.*, 3.

(4) *ibid.*, 7.

(5) *ibid.*, 17.

(6) *ibid.*, 7.

(7) *ibid.*, 19.

(8) *ibid.*, 30.

(9) *ibid.*, 30.

(10) *ibid.*, 31.

(11) Kinloch, *ibid.*,

(12) Greville, *A Discourse opening the Nature of Episcopacie*. Haller, *Tracts on Liberty*, II, 110~.

(13) *ibid.*, 55.

拙著 人民協約の研究 弘文堂 昭和三七年 八九—九二頁。

ホールの著作は、十巻に余る全集としてオックスフォードから出版されている。その大部分を占めるのが、神学、説教、黙想録であり、彼が宗教思想家として第一級の人物なることを示している。革命期の宗教政治論争たる前出の四篇は、その一部をなすに過ぎない。<sup>(4)</sup>

神学的にカルヴィン主義に立つものといえる彼が、波乱に当面するアングリカン・チャーチの代弁者になったことは、いうまでもなく彼の学識が監督中抜群であるところから、ウィリアム・ロードの期待を、もっぱら受けていたことによる。ホールがそれに答えて、王権とアングリカンの監督制度のためにたたかったのは、一見非常な思想的転向のごとく見えるが、そこに彼の権威主義に対する愛着が、如実にあらわれるといえよう。平和と秩序を好む彼が、イギリスの旧体制に、何の躊躇もなく挺身的に奉仕したことは、反対派の陣営から、「物欲しげな思考」と輕蔑され、日和見主義者<sup>(5)</sup>ときびしく批判されるに至った。

ひるがえって、ローマ教会における司教は、<sup>(6)</sup>「使徒の後継者にして、神法によって個々の教会の頭に位し、それをローマ教皇の権威のもとに、固有権をもって統轄する」(教会法三二九)ものとしている。ローマから分離したアングリカン・チャーチにおいても、教会に関する靈的絶対権威は監督制度に伝わるものと見なければならず、教会行政上の必要欠くべからざる組織たることに変りはない。これと同じ特色は、ルーテル教会にも、メソジスト教会にも跡をとどめている。かかる制度の有無に関する議論は、教会論としては重大とならざるを得ないが、十七世紀にあつては、教会が他派に対する寛容、国政に対する中立的立場を知らず、国立教会の地位を維持乃至は獲得せんとするとこ



るに問題があり、その意味で、たといアングリカン・チャーチが清教徒の長老教会に移行しても、解決は得られず、オリヴァー・クロンウェルの共和国における、聖者議会にもその傾向は残存するものといえる。

したがって、ホールによって「聖職政治論」に示されるところは、教会行政上の監督の地位について弁護することを主たる目的とし、また彼にはそれ以外になし能わなかったにもかかわらず、実際にはそれをはるかに上廻る難問、すなわち、チャールズ王をいただき、国政の中核に權威的存在たる監督の地位を論証する役割を負うものであった。

ホールの聖職者としての立場が、いかに平和的に、純粹に、權威に服従するとはいえ。彼の解答は、宗教的政治の渦中であって、アングリカン・チャーチが最悪の逆境に立たされた時期に行なわれ、待望される近代的政治理論への解決の鍵とはならなかったのである。

註(1) 前掲ウィンター版全十巻の中、第九巻に収録されている。

(2) Kinloch, *ibid.*, 157.

(3) Kinloch, *ibid.*, 156.